

上田市文化財調査報告書第125集

山越古墳

平成27(2015)年度県営中山間総合整備事業殿城地区に伴う
山越古墳発掘調査報告書

2016. 3

長野県上小地方事務所

上田 市

上田市教育委員会

上田市文化財調査報告書第125集

山 越 古 墳

平成27(2015)年度県営中山間総合整備事業殿城地区に伴う
山越古墳発掘調査報告書

2016. 3

長野県上小地方事務所

上 田 市

上田市教育委員会



图1 山越古墳位置図(1/50000)

序

山越古墳が所在する殿城地区は、西に神川の清流が流れ、東には烏帽子岳がある、自然の恩恵を受けた地域です。また、この古墳は、殿城山の扇状地の上部に位置しますが、裾部には赤坂將軍塚古墳や塚穴古墳といった古墳時代後期の円墳があり、いずれも上田市指定文化財となっています。

今回、県営中山間総合整備事業殿城地区に伴い実施した山越古墳の発掘調査は、この歴史ある地域に新たな知見をくわえる、たいへん重要な調査となりました。今回の調査にあたり、委託者である長野県上小地方事務所、地元の中山間総合整備事業の実行委員会の皆さまには、至る所で調査の便宜を図っていただきました。また、現場作業員の皆さんには、厳しい作業に献身的に従事していただきました。

日本国憲法第25条第1項には、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」とあります。健康であり、文化的である生活は、最低限のこととして国や自治体が保障すべきこととなっています。そして、地方自治、住民自治の発展は、地域の文化と過去の歴史を再認識し、これからの展望の議論を重ねることにかかっています。今回の調査事業がその一助になれば、最大の喜びとするところです。

文化財の保存活用の課題は、山積していますが、今後とも住民の皆さまと力を合わせながら、末永くこの文化財を保護し、感動を伝えていきたいと存じます。

最後となりましたが、今回の発掘調査に御尽力いただいた関係各位に心から感謝申し上げ、序といたします。

平成28年3月

上田市教育委員会教育長 小林一雄



PL.1 山越古墳航空写真 (写真上が西)



PL.2 山越古墳航空写真 (写真上が西)



PL.3 山越古墳航空写真 (写真上が西 / 写真下方の石列が側壁、上方の石列は畦畔)



PL.4 山越古墳立地 (西から 手前の石積は近現代のもの 中央に古墳の右側壁 右奥の峰が殿城山)



PL.5 山越古墳調査前（西から / 石室の壁石が畦畔として利用されている）



PL.6 山越古墳調査前（南から / 古墳の右側壁）

例 言

- 1 本書は、長野県上田市殿城字山越に所在する山越古墳の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野県上小地方事務所の委託と国庫補助事業「市内遺跡」により、上田市が実施した。調査及び調査に係る事務は、上田市教育委員会事務局文化振興課が行った。
- 3 現地調査は、平成 27 (2015) 年 11 月 17 日から 12 月 22 日にかけて実施し、整理・報告書作成作業は、平成 28 (2016) 年 3 月まで断続的に実施した。
- 4 基準・水準点設置、メッシュ（グリッド）設置に係る各種測量、空中写真測量及び空中写真撮影は、共栄測量設計株式会社上田支店に委託して実施した。また、遺構のセクション等の実測作業は、饗場奈那江・石合好江・山本万里が行った。
- 5 整理・報告書作成作業は、饗場奈那江・石合好江・山本万里が行った。
- 6 本書に使用した写真は、主に中沢徳士が撮影し、航空写真は委託業者が撮影したものを使用した。
- 7 本書の編集は中沢が行った。
- 8 本調査に係る資料は上田市教育委員会の責任下、上田市立信濃国分寺資料館に保管している。
- 9 作業員の皆さん

饗場奈那江、新井邦雄、石合好江、川上京子、川上恒生、坂口通子、佐原弘悦、関大子、竹内和好、田中八枝子、中村真理子、宮沢秀昭、村松秋恵、山本万里

凡 例

遺構

- 1 実測図については、国家座標の北を頁の上とし、例外は方位を示した。
- 2 縮尺は、原則として原図 1/10 と 1/20 に 1/3 縮小をかけて 1/30、1/60 とした。
- 3 レベルの標記はすべて海拔高（単位：m）である。
- 4 遺構観察表の長さの単位は m で、主軸方位は国家座標の北からの角度で示した。
- 5 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1990 を用いて判別した。
- 8 遺構写真の縮尺は任意である。

遺物

- 1 実測図は、原則として原図 1/1 に 1/3 縮小をかけて 1/3 とした。
- 2 遺物観察表の「胎」は胎土を、「焼」は焼成を、「色」は色調を示し、色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色彩票監修の『新版標準土色帖』1990 を用いて判別した。法量の単位はすべて cm である。
- 3 写真の縮尺は任意である。

調査の体制

調査は、上田市教育委員会事務局文化振興課が実施した。その体制は次のとおりである。

（教育長） 小林一雄 （教育次長） 西入直喜 （文化振興課長） 浅野之宏 （文化財保護担当係長） 塩崎幸夫・和根崎剛 （文化財保護係 / 調査担当） 中沢徳士・松崎訓央

目 次

本文目次

序	
調査位置図/巻頭写真	
例言/凡例/調査の体制	
目次	
第一章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過と調査日誌(抄)	2
第二章 遺跡の環境	5
第1節 自然的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第三章 調査の結果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構図	10
写真図版	19
報告書抄録/奥付	22

図版目次

図1 山越古墳位置図(1/50000)	
図2 山越古墳位置図(1/10000)	
図3 県営中山間総合整備事業殿城地区施工範囲図	2
図4 山越古墳周辺遺跡分布図	4
図5 上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ	5
図6 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)	6
図7 遺構全体図	10
図8 遺構実測図1	11
図9 遺構実測図2	12
図10 遺構実測図3	13
図11 遺構実測図4	14
図12 遺構実測図5	15
図13 遺構実測図6	16
図14 セクションポイント配置図	17
図15 セクション図	18

写真図版目次

巻頭カラー

- PL.1山越古墳航空写真(写真上が西)
 PL.2山越古墳航空写真(写真上が西)
 PL.3山越古墳航空写真(写真上が西/写真下方の石列が側壁、上方の石列は畦畔)
 PL.4山越古墳立地(西から 手前の石積は近現代のもの 中央に古墳の右側壁 右奥の峰が殿城山)
 PL.5山越古墳調査前(西から/石室の壁石が畦畔として利用されている)
 PL.6 山越古墳調査前(南から/古墳の右側壁)

..... 3

調査日誌写真

- PL.7 H27,11,17調査地周辺の耕作土を剥ぐ
 PL.8 H27,12,7石積除去と原地形検出
 PL.9 H27,12,9遺構実測と石室内掘り上げ
 PL.10 H27,12,21石室完掘(西)
 PL.11 H27,12,21石室完掘(北)

..... 3
 3
 3
 3
 3

本文写真

- PL.12 赤坂將軍塚古墳(南)
 PL.13 赤坂將軍塚古墳石室
 PL.14 塚穴古墳(南から)

..... 7
 7
 9

写真図版

- PL.15 墳丘の名残と思われる石積(南西)
 PL.16 石積の断ち割り 耕作地の造成跡の下に地山がマウンド状に検出される(北)
 PL.17 石室部の掘り上げ 手前に排水溝(北東)
 PL.18 完掘 石室部該当範囲に礫が濃密に出る(南西)
 PL.19 完掘 写真左に排水溝(西)
 PL.20 完掘 排水溝(東)
 PL.21 完掘 排水溝と石室該当部(北東)
 PL.22 完掘(北東)
 PL.23 完掘(北)

..... 19
 19
 19
 20
 20
 20
 21
 21
 21

第一章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

平成26年、長野県上小地方事務所農地整備課（以下「長野県」という。）から、上田市殿城地区における「県営中山間総合整備事業殿城地区」（以下「整備事業」という。）の計画策定に伴い、施工地区内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地「山越遺跡」の保護について協議があった。山越遺跡は、「上田市の原始・古代文化」（1974 上田市教育委員会）によれば、『塚穴遺跡の南西に、農道をはさんで所在する水田地帯の遺跡で、分布範囲はおおよそ5,000㎡、塚穴遺跡と同期一体の遺跡と推定され、土師国分期の坏・甕の破片、須恵器片が表採される。保存状態は良好と思われる。』とあり、事務局では、平成27年2月18日、雪の降りしき中、施工範囲内（図1 朱塗範囲）において山越遺跡の範囲確認の試掘調査を実施した。

調査は、施工範囲内において傾斜に沿って東西方向に2本の長いトレンチをいれたが、遺構・遺物の出土は皆無で、遺跡の広がりとは確認出来なかった。しかし、施工範囲の地形図を改めて確認すると、施工範囲の西端に円状の張り出しがあり、あるいは古墳の名残かと思われた。現地で確認トレンチを入れようとしたところ、東側に1m前後の平石を並べた畦畔の石列が7mほど延びており、明らかにその前後の畦畔の石積とは様相が異なっていた。そこで、その平石の石列に沿ってトレンチを慎重に入れたところ、南端で古墳の羨道と石室を分ける框石が現れ、この平石の石列が古墳石室の右壁の名残であることが判明した。

調査の結果、これまでの遺跡分布図で表記されていた山越遺跡の範囲は、今回の施工区にまで広がっていないことが判明した一方、分布図に表記されていなかった新たな古墳が存在していたことが確認され、今後の発掘調査に至った。

調査は、総事業費5,000千円で、整備事業の負担割合に従って、長野県から9/10=4,500千円の上田市への委託と、農家負担分である1/10=500千円を文化財保護部局である上田市が国庫補助を得ながら負担して、基準点測量や機材の賃貸借契約を締結して、11/17現地調査に着手した。

第2節 調査の方法

1. 遺跡名と略記号

今回の調査では、「山越古墳」の略号として「YKK」を付した。現地調査では、国家座標に基づくメッシュによって位置を設定し、各種の記録や遺物の注記等に用いた。

2. 調査区の設定

調査区域は、施工により破壊される範囲の記録保存を目的として設定した。なお、古墳の北側は施工範囲から除かれたため、現状保存としたが、主体部は今回の調査範囲内となっている。

3. グリッドの設定

各種の現地平面測量には、このメッシュ番号が用いられている。また、グリッド番号は、北東の交点のメッシュ番号を用い、遺物の取り上げに用いた。

4. 遺構測量

遺構の平面測量は、前述のメッシュを基準に1/20縮尺で行った。また、現地調査終了時には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量も行っている。断面図や土層図は手取りによるものである。

5. 遺構の掘り上げ

現地調査における表土の除去は、主に重機によって行い、その後遺構検出作業、遺構掘り上げ作業はすべて人力で行った。

第3節 調査の経過と調査日誌（抄）

1 調査の経過

調査は、11月17日に着手した。最初に、古墳周囲の水田の耕作土が、下層の基盤土と混ざらないようバックホーで剥ぎ、クローラードンプで搬送して、まとめて確保することから始めた。これは、当地の耕作土がきわめて浅く、20cm程度の耕作土層を剥ぐと、すぐに山からの押し出しの礫混じりの土にあたり、後の施工において耕作土を確保することがきわめて困難なためである。したがって、この耕作土の確保、表土剥ぎは、石室想定地の中止点から外周20m程度まで行っておく必要があった。その過程でトレンチ掘りも行いながら周溝の確認作業も実施したが、周溝は確認されず、墳丘全体の規模を推定することは出来なかった。

その後、露出している古墳石室内の表土をバックホーにより慎重に除き、その後の検出作業はすべて人力によった。作業の進捗とともに、古墳築造時の地形が直近の水田の整備によって、特に古墳の西側に大きく盛られた箇所があり、人力でこれを除くのは困難だったため、小型のバックホーにより盛り土を剥ぎ取り、その後に人力で残った墳丘地形の検出を行った。この結果、古墳のマウンドに沿っていたと思われる半円球状の地山の地形が確認され、この古墳が元々の地形を利用しながら削り出すように墳丘の基礎部を造っていたことが推定された。

石室内は下部構造がほとんど無くなっていたが、最下部と思われる地山の上に礫を粗く敷いた構造が検出された。この礫の検出は、移植鏝などの小さな道具で、上の攪乱した覆土を除く作業であり、時間を要した。この箇所の調査では、失われた石室の奥壁と左壁の最下部の石の抜け跡の検出が期待されたが、明瞭な形では確認できなかった。しかし、石室の北端に東西方向の排水溝が検出され、奥壁のおおよその位置が確認できたのは成果であった。ただ、この排水溝が、残存していた右側壁と鋭角に交差していることに若干の疑義は残った。

遺物は、遺構の残存状況と比してきわめて少なく、土器片が3点ほど出土しただけであり、この遺物から古墳を想起させるものは皆無であった点が惜しまれる。

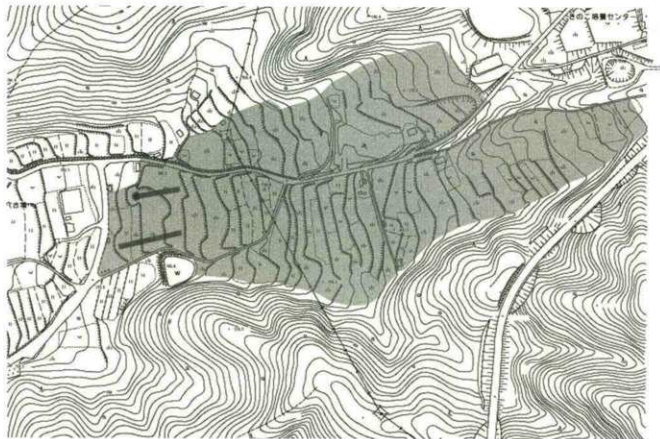


図3 泉宮中山間総合整備事業殿城地区施工範囲図

2 調査日誌(抄)

- 11/17(火) バックホーにより古墳周辺の耕作土を剥ぎ、各水田毎にクローラダンプで運んでまとめ、排土となる耕作土下の置き場を作る。
- 11/18(水) 重機による表土剥ぎ。朝は濃い霧が立ちこめる。
- 11/19(木) 重機により水田の畦畔となっている石積を除き、耕作土を剥いだ地山の上に運ぶ。
- 11/25(水) 作業員により、古墳とその周辺の除草と清掃を行う。
- 11/27(金) 石室内を3m グリッドで掘り上げ始める。
- 12/2(水) 古墳の周囲の表土剥ぎやトレンチ掘りにより、周溝がないことが確認される。また、石室内は下部構造がほとんど残っておらず、地山の上に礫を放り込んだ状態であることが判明する。
- 12/4(金) 石室西～南側が水田造成により最大で1.2mほど土盛されていることが判明し、小型バックホーにより剥ぐこととする。
- 12/8(火) 石室の北側で東西方向の幅約0.1mの溝が検出され、古墳石室の排水溝と考えられる。
- 12/9(水) 朝方、強い寒気により地面が0.1m近く凍上する。遺構のセクション等の実測を行う。
- 12/17(木) 石室周囲の盛り土除去と検出がほぼ終了する。墳丘の盛り土は残存しないものの、地山を半球状に削り出していることが読み取れる。
- 12/21(月) ラジコンヘリによる航空写真測量を行う。以上で現地調査終了のため、発掘機材等を撤収する。



PL.7 H27,11,17 調査地周辺の耕作土を剥ぐ



PL.8 H27,12,7 石積除去と原地形検出



PL.9 H27,12,9 遺構実測と石室内掘り上げ



PL.10 H27,12,21 石室完掘(西)



PL.11 H27,12,21 石室完掘(北)



図4 山越古墳周辺遺跡分布図

遺跡番号	名称	所在地	時代	備考
上田 1	日向邊跡	殿城字日向・上堀	縄文・弥生	
上田 2	石矢邊跡	殿城字石矢・日向山崎	縄文・弥生・平安	
上田 3	赤坂將軍塚古墳	殿城字石矢1340	古墳	上田市指定文化財
上田 4	片原邊跡	殿城字片原	縄文・平安	
上田 5	北原敷邊跡	殿城字北原敷	縄文・古墳	
上田 6	城山邊跡	殿城字城山	縄文	
上田 7	上堀邊跡	殿城字上堀	平安	
上田 8	堀城邊跡	殿城字堀城	平安	
上田 307	岩清水邊跡	殿城字岩清水	縄文	
上田 401	小玉原邊跡	殿城字小玉原	縄文・弥生	

遺跡番号	名称	所在地	時代	備考
上田 402	堀穴古墳	殿城字堀穴	古墳	上田市指定文化財
上田 403	山越邊跡	殿城字山越	平安	
上田 407	矢沢氏支城跡	殿城字古城	近世	
上田 408	矢沢城跡	殿城字城山	近世	
真田 184	上原邊跡	本原・上原 町下	縄文・弥生	
真田 186	町下邊跡	本原・上原 町下	縄文・古墳・平安	
真田 187	町下古墳群			
真田 188	檜林古墳群			
真田 196	東出早邊跡	本原・東出早	縄文	
真田 197	堤田邊跡	本原・東出早	旧石器・縄文・古墳・平安・中世	

表1 山越古墳周辺遺跡分布図

第二章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

1 上田の気候

長野県は本州中央部に位置し、周囲を山に囲まれている。このため上田の気候には内陸性の特徴がみられる。夏には日中の気温は東京よりも高温になることが多いが、乾燥しており、夕方から明け方までは気温が下がるためしのぎやすい。冬期間には長野県内でも県北部に比べて上田・佐久は降水量が少なく、太平洋側気象区の特徴を示している。

上田市の年間平均気温は12.1℃で、県下では飯田地方に次いで暖かい。気温の年較差は25.8℃で札幌の数値に近く、寒暖の差が大きい。市内でも場所による気温の差が大きい。市街地が最低、最高気温ともに最も高い。年平均湿度は66%で、東京などと並んで全国でも最も低い類に入る。

上田では平均年間降水量が878.7mmと1,000mmに達せず、全国的に見ても雨の少ない土地である。これは海からの湿った空気が周囲の高山に遮られて雨や雪を降らせ、上田上空に達するまでに乾燥した空気になってしまうためである。降雨は年間を通じて少ないのが特徴である。市内では山に近い地域ほど雨が多いが、平地では塩田平に比べて千曲川右岸の降水量が少ない傾向がある。

冬季は西南西と東の風が多く、夏には南東の風が卓越風である。年間を通じて北および南からの風が大変に少なく、東や西の風が多い特徴がある。これは地形の影響によるもので、南と北に山が連なり、千曲川に沿った東西方向に風が吹き抜けるためである。

日照時間が長いのも上田の特徴で、年間2000時間以上というのは長野県下のみならず、全国的にも高い数値である。快晴日数の平均は年80日前後に達する。

2 上田の地形と地質

上田は盆地状の地形で、周囲を独鈞山・大林山・太郎山といった標高1200～1300m級の山々に囲まれている。千曲川は市内で標高465mから417mまで流れ下り、この右岸に中心市街地が広がっている。また、左岸側では、海拔450～500mほどの塩田平が水田地帯を形成している。塩田平には寡雨に備えた灌漑用の溜池が多く見られる。

上田市を東西に流れる千曲川は奥秩父の甲武信ヶ岳付近を水源とし、長野県下の北半を貫いて新潟県入ると信濃川と名を変え、日本海に注ぐ全長367kmの日本一の大河である。上田市内でこれに注ぐ主な支流としては、右岸から神川・矢出沢川などがあり、左岸からは塩田平を流れる産川水系が浦野川に合流している。千曲川の市内中心部での川原は幅400～600mにわたって広がる。

上田地域の地層は海成層の上に湖成層があつて、さらに約1万年前頃からは湿地性や扇状地の堆積物が形成した地層がある。これに火山に由来する貫入層や堆積物が加わり、市内でも地域によって多様な地質が分布している。古い時代の地層は山地に見られ、太郎山などに産する緑色凝灰岩は古くから礎石などの建材として利用されてきた。上田でとりわけ特徴的なのは千曲川流域に発達している階段状の地形で、これには河岸段丘の段丘崖と断層で形成された断層崖とがある。また、扇状地地形は山を下った急流が緩斜面に出る山際に形成され、大小さ

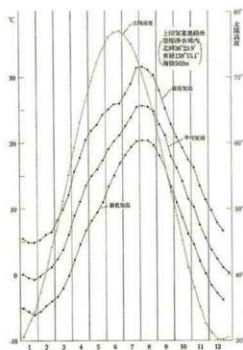


図5 上田市の最高・最低気温、平均気温の年変化、太陽高度の年変化グラフ

まざまに見られる。

盆地内の地層や地形は、おもに第四期(170 万年前まで)に形成された。厚く堆積した湖成層のほか、川や谷の底を埋めて堆積した築屋層が広く分布しているが、このうち千曲川に沿った地域が断層によって落ち込み、段丘状の崖地形が形成されている。

3 山越古墳周辺の地形と地質

山越古墳は上田市東部の神川右岸、に位置している。神川第1段丘面の東限は瀬沢川の線で、町吉田から大屋に達する線にあたり、これより東方、山越古墳の所在する地域は、烏帽子火山裾野地域となる。

烏帽子岳南西麓は、神川に向かって西に硫化する行沢川(稲倉川)に沿って扇状地が形成されているこの扇状地は、神川第2段丘面上にも及び、その土砂により宅地や水田を荒廃させていたため、その地域を神明河原と呼び、川の名前も神明川と改まっている。その為、行沢川と漆戸の神川第1段丘崖上の崖の崩壊と押し出しの地点には、漆戸の集落の氏神である皇大神社が鎮座している。しかし、この川筋は人々に飲料水を供してくれていたことも確かである。神川上流域には伊勢山狭隘と矢沢狭隘の2つの狭隘部をもつ。ここは、上田盆地と真田の洗馬地方を結ぶ咽喉部(のど元)に当たり、要害地である。その為、戦国時代の山城が集中する地域でもある。伊勢山狭隘は、伊勢山と虚空蔵山が神川の右岸で対峙している。

山越古墳は、矢沢狭隘の東、殿城山(1193.4m)の扇状地の上部に位置し、扇状地の北寄りや赤坂川が神川に向かって流れる。西下がりの地形を成し、黄橙色の山砂と大小の山礫によって別所層といわれる泥岩層の地山を形成している。

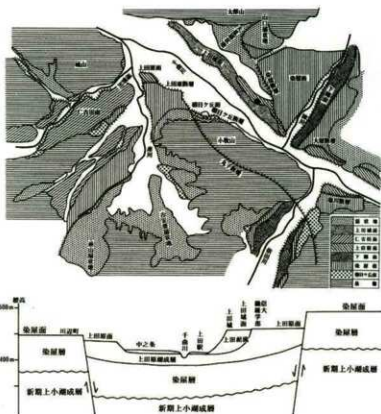


図6 上田盆地の地形区分(上)及び地形断面図(下)

第2節 歴史的環境

1 先史～縄文時代

上田盆地周辺に人の居住が始まったのは、およそ2万年前頃と考えられている。この時代の遺跡は菅平高原や和田峠周辺などの高地に集中して分布するが、塩田平などの平坦地でも人の活動を示唆するような遺物の発見が徐々にみられるようになってきている。

縄文時代になると、山裾の扇状地が主要な生活の場となっており、このほか千曲川をはじめとする河岸段丘の縁辺部も盛んに利用されている。これに対して河岸段丘の内部や氾濫原の沖積地には縄文人の活動痕跡は見られない。千曲川右岸の一帯は、築屋面にも上田城面にも縄文遺跡はわずしか発見されておらず、左岸側やその他の支流域とはやや異なる様相を示している。

山越古墳近在では、縄文期の遺跡も多く、特に殿城地区の八千原遺跡は、中期後葉から後期中葉の大規模な集落が確認されている。

2 弥生時代

千曲川流域では、弥生時代の中期後半から長野地方や佐久地方などで大規模な集落が営まれるようになった。上田地方ではこれより遅れ、弥生時代の後期後半から終末期にかけて集落遺跡が出現し、全域に分布する。このような時期差の理由は現時点で必ずしも明らかでないが、降水量の少ない当地方でも灌漑技術による稲作が可能になったことなどが想像されている。上田の弥生時代における集落の立地は、河岸段丘上や自然堤防など冠水しにくく、水田に適した低湿地を近くに伴う場所がおもに選ばれている。塩田平の産川流域などが最も利用されており、千曲川右岸でも上田城面に遺跡が分布している。集落は数軒を単位とする小規模なものがほとんどだが、居住域以外を含めた全体像が明らかになった例はまだなく、実態には不明な点も多い。

千曲川右岸の段丘上に位置する弥生遺跡としては、国分寺周辺遺跡群や常入遺跡群などが市街地の東方にある。常入遺跡群に含まれる下町田遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代初期にかけての集落遺跡で、90軒の密集した竪穴住居と大量の遺物が出土している。また、上田原遺跡における周溝墓のように地域の有力者の存在を窺わせる発見などから、上田小県地方がこのころ一つの勢力圏を形成しつつあったと想像する見方もある。本遺跡周辺では、林之郷遺跡の発掘調査で、後期の住居址が確認されている。

3 古墳時代

4世紀後半の大蔵京古墳に始まる上田地方の古墳は、5世紀後半まで方墳のままで、他の千曲川流域のような前方後円墳への変化が大きく遅れる。このことは当地方が中央政権の支配下に置かれるのが他に比べて遅かったことを物語ると考えられている。古墳時代前期の集落は小規模なものが多く、後期には建物が集中して建てられ、大規模なムラが出現する。本遺跡周辺では、林之郷遺跡群や法楽寺遺跡の発掘調査において、後期の集落跡が良好な形で調査されている。

古墳を見ると、東信地方で唯一の前方後円墳である二子塚古墳は黄金沢川扇状地の扇尖部に位置しており、6世紀前半から中頃の築造と考えられている。上田にある古墳ではこのほかに、帆立貝式の王子塚、円墳の新屋古墳群、下之郷古墳群などが代表的な例として上げられる。

本古墳が立地する赤坂の扇状地では、赤坂將軍塚古墳と塚穴古墳がある。赤坂將軍塚古墳は、後期の円墳で東西の径約18m、南北径約17m、高さ約5mで、この地域の代表的な古墳のひとつとなっている。玄室の規模は、長さ5m、奥幅1.9m、中央部分の幅が2.35m、高さ2.9mをはかり、上田市にある横穴式の石室を持つ古墳の中では最も規模が大きく、石室内部の様子がよく残っている古墳として知られる。また、本古墳から100m余り西に位置する塚穴古墳も後期の円墳で、墳丘は大きく削られているが、南北径7.5m、東西径7.0m、高さ2.8mを計る。内部の石室は早い時期に開けられており、出土品については全くわからない。内部の石室の造り方は、奥壁を大きな平石二枚立てて重ね、側壁は基部に平石を立て、その上部は平石の小口積みとしたものである。

4 律令期

大宝律令のもとで信濃国にも国衙が設置され、中央から国司が派遣された。この信濃国府がどこに所在したかは今もって明らかになっていないが、「和名類聚鈔」に



PL.12 赤坂將軍塚古墳(南)



PL.13 赤坂將軍塚古墳石室

は筑摩郡に在りと記されている。しかし、国府と国分寺は近接して置かれるのが通例であることから、当初小県郡に置かれた国府が9世紀頃に筑摩郡に移ったと考えるのが現在の通説となっている。上田における国府の所在地としては、条里的遺構が今も残る神科台地と、常田の信州大学繊維学部敷地周辺に推定されている。信濃の国分寺は、昭和38年から40年代前半の発掘調査によって僧寺跡と尼寺跡が併置して確認され、史跡公園として整備されている。

山越古墳が立地する神川左岸殿城地区に存在する奈良・平安期の代表的遺跡としては、前述の大規模集落である法楽寺遺跡がある。

5 中世

律令制度が崩壊に向かうと、上田小県地方でも開発領主の寄進により貴族や寺社が経営する荘園が数多く成立した。「吾妻鏡」によれば当地方には八条院領常田庄や最勝光院領塩田庄など6つの荘園と3ヶ所の牧の名が見られる。この時代には地元で所領を持つ地方武士達が勢力の増大を目指して都に向かったが、木曾義仲が敗北して源氏の世となると、武士達は鎌倉御家人を指向するようになった。このような武士としては、海野氏、祢津氏、泉氏、浦野氏などが代表的である。一方、それまで有力者だった塩田氏などは義仲に与したために所領を失う結果になったかとみられる。鎌倉時代の塩田平では幕府の重臣である島津氏、その後は北条氏が地頭職をつとめ、北条義政がここに通世してからは塩田北条氏が三代60年間にわたって仏教文化を花開かせた。今日でも安楽寺三重塔をはじめとする数多くの歴史的建造物、史跡が残されている。なお、国分寺郷は荘園化されることはなく、終始公領であった。

鎌倉幕府が滅亡して信濃から北条氏の勢力が消滅すると、当地方も地方領主による争乱の時代に入る。荘園の消滅と並行して守護と国人領主の対立が激化するなか、塩田城を本拠とする村上氏が支配を拡げたが、天文20年に甲斐の武田勢によって攻略された。地土の真田氏は同じ頃に武田に仕えるようになり、次第に頭角を顕わしていったが、武田滅亡後の戦乱を主家を次々と変えることで巧みに切り抜けたことで知られる。天正11年(1583)には上田城の築城を開始し、間もなく小県郡一円を支配下に収めた。また、現在の市街地の骨格をなす城下町も形成された。真田が上杉に臣属したために徳川から攻められ、関ヶ原合戦でも昌幸・信繁父子が西軍に加わったために上田城は徳川勢の攻撃にさらされたが、よくそれをしのいだ。東軍勝利の後には、真田信之が沼田・小県を合わせた9万5千石を領して上田城主となり、領域支配を確固たるものにした。山越古墳のある殿城地域は、真田一門筆頭の矢沢氏の本質として矢沢城跡や矢沢支城が残り、居館跡と思われる遺構も残る。

6 近世

徳川幕府の時代には、城主が真田氏から仙石氏、松平氏と代わる中、城下は物資の集散地として栄えた。現在見る上田城はおもに仙石氏の時代に修築されたもので、城下町の整備もこの時期、寛永頃までには概ね完成したようである。上田は城下町であると同時に北国街道の宿駅を兼ねており、流通の拠点であった。様々な産業が育ち、特に上田紬は養蚕とともに大きな発展をみせた。山越古墳の北西には、真田の上田進出の道となった上州街道(国道144号線)が通る。

7 近現代

上田の城下町は、明治22年(1889)に市町村制が施行されて上田町となった。大正8年(1919)には市制を施行、同10年(1921)には城下村を編入し、蚕都として栄えた。昭和期には、29年(1954)の塩尻村、川辺村に始まって周囲の町村をたびたび編入しながら48年(1973)には人口10万を擁する都市となった。

山越古墳のある殿城地区は、明治22年(1889)に漆戸村と合併し、昭和31年(1956)には豊里村と合併して豊殿村となり、昭和33年(1958)に上田市に合併した。

第三章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査の経過にも記したとおり、山越古墳はその墳丘のすべてが削平され、わずかに右袖石の一部と墳丘の外周の名残が地形に残っていたものである。調査の主眼は、石室の下部構造の残存状況と、奥壁や左側壁の抜けた痕跡、墳丘と周溝の残存状況に置かれた。

石室の下部構造については、残念ながら失われており、遺物の出土もなかった。また、奥壁や左側壁の抜けた痕跡も判明せず、結果として石室の規模についても判然としなかったが、奥壁の手前に設けられたと思われる排水溝と、南端で古墳の羨道と石室を分ける堰石が検出されており、玄室の長さは右壁で概ね 6.56m と判断された。ただ、排水溝と右袖石が直交していないため、石室の全長についても疑義は残る。墳丘についても切り盛りが著しく、版築等の痕跡は確認されなかったが、耕作の際に盛られた土を除いたところ、半球形のマウンド状の地形が現れており、古墳の墳丘の地山の形が明らかとなった。また、地勢を見ても、扇状地の尾根部を利用して造られたことも判明した。一方、周溝については、東・南・西方向にトレンチを入れて確認したが、検出されなかった。

この古墳の立地であるが、この古墳の西、約 125m の地点、殿城 4916 番地に上田市指定文化財となっている塚穴古墳がある。塚穴古墳の墳丘の東南部は周辺の水田耕作の際に大きく削られているが、北西部は比較的良く残っている。墳丘の規模は南北径 7.5m、東西径 7.0m、高さ 2.8m を計り、内部の石室は開けられており、出土品はない。石室の造り方は、奥壁を大きな平石 2 枚立てて重ね、側壁は基部に平石を立て、その上部は平石の小口積みとしている。また、玄室の天井には大きな平石を二枚のせ、さらに羨道部の天井に一枚使っている。この塚穴古墳は、上田地域では比較的標高の高い場所に位置する点や墳丘や石室の造り方などに特徴がみられる古墳であり、石室も比較的良好に残っている。

さらにこの塚穴古墳から 780m、山越古墳から 905m 西、殿城 1340 番地には赤坂將軍塚古墳がある。この古墳の規模は、東西の径約 18m、南北径約 17m、高さ約 5m で、この地域の代表的な古墳のひとつとなっている。玄室の規模は、長さ 5m、奥幅 1.9m、中央部分の幅が 2.35m、高さ 2.9m をもち、さらに石室の入口から玄室に通じる羨道は、長さ 3.5m、幅 1.3m を計る。玄室の奥壁は幅いっぱいの大きな石を上下に 2 枚重ねており、両側の壁は基礎部分に大石を置き、その上部を平石の小口積みとし、羨道部分も同様な積み方をしている。さらに天井は玄室部に 4 枚、羨道部に 2 枚の大きな平石をのせている。内部からの出土品は不明です。赤坂將軍塚古墳は、墳丘も削られ、やや小規模となつてはいるが、上田市にある横穴式の石室を持つ古墳の中では最も規模が大きく、石室内部の様子がよく残っている古墳として知られており、こちらも上田市指定文化財となっている。

さて、この扇状地には、山越、塚穴、赤坂將軍塚の 3 基の古墳があったことは本調査により確定したが、かつては他にもいくつかの古墳があり、古墳群を形成していたとの伝承がある。この扇状地内にある水田や畑、民家の石積、小川の橋などには、おそらく古墳の石室などで使われたであろう大きな平石がところどころに見受けられ、この扇状地にかつて古墳群が存在していたことを示唆しているようである。



PL.14 塚穴古墳 (南から)

第2節 遺構図

図 は遺構全体図である。図画番号 2,4 中央に太線で示したのが石室の右壁と框石である。その東側のマウンドは残っていない。図画番号 1,3 の中央から 5 の北東隅を斜行するの石列は耕作地の石積で、比高差は 0.6m 前後を計り、墳丘の裾部近辺にあたると思われる。また、2 の南辺中央を東西行する礫の空白は石室の排水溝と思われるが、石室右壁と鋭角をなしている。

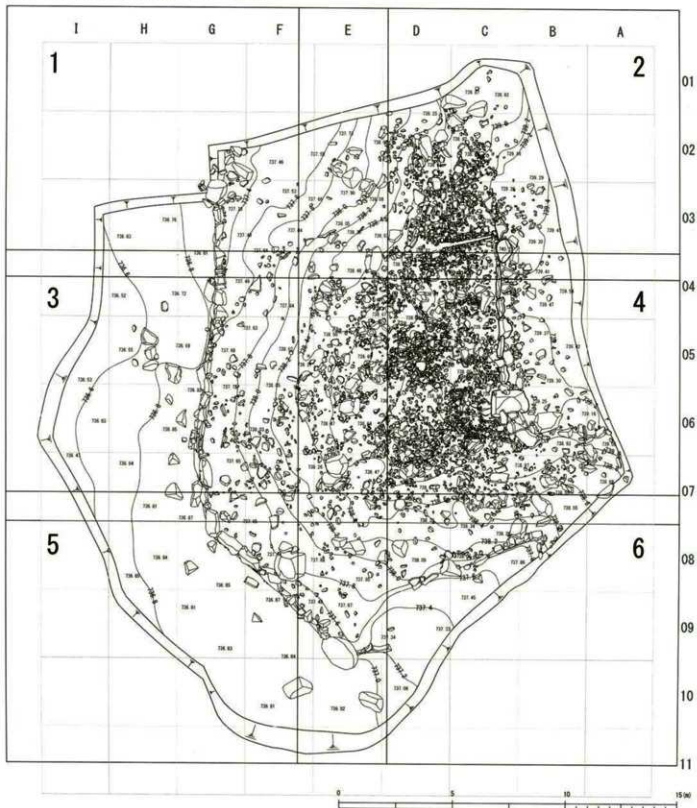


図7 遺構全体図



図9 遺構実測図2



图 10 遺構実測図 3

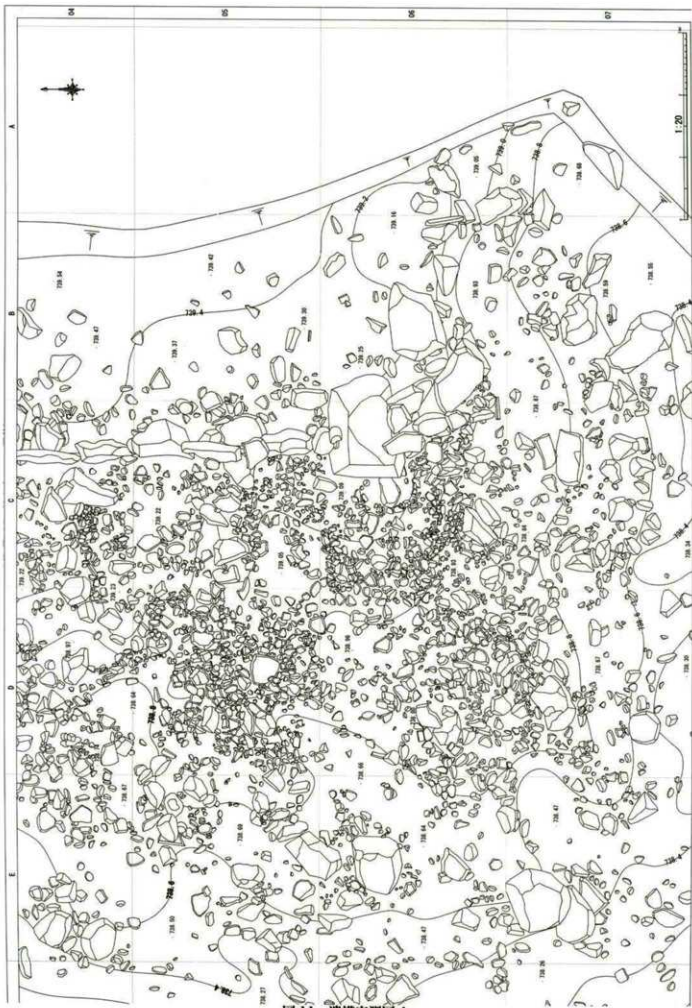


図 11 遺構実測図 4

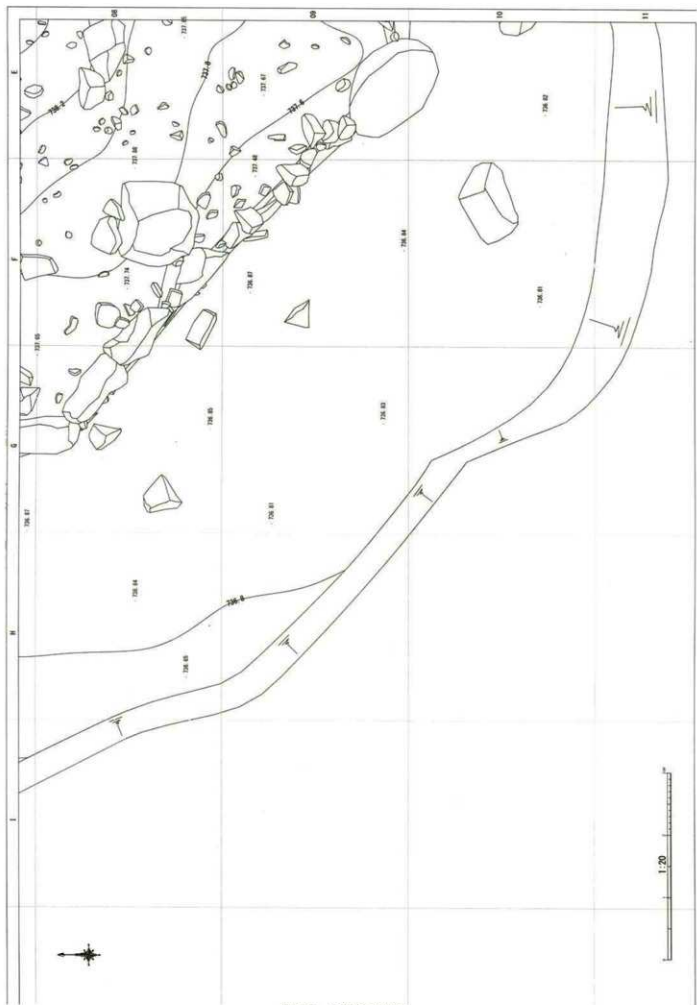


図 12 遺構実測図 5

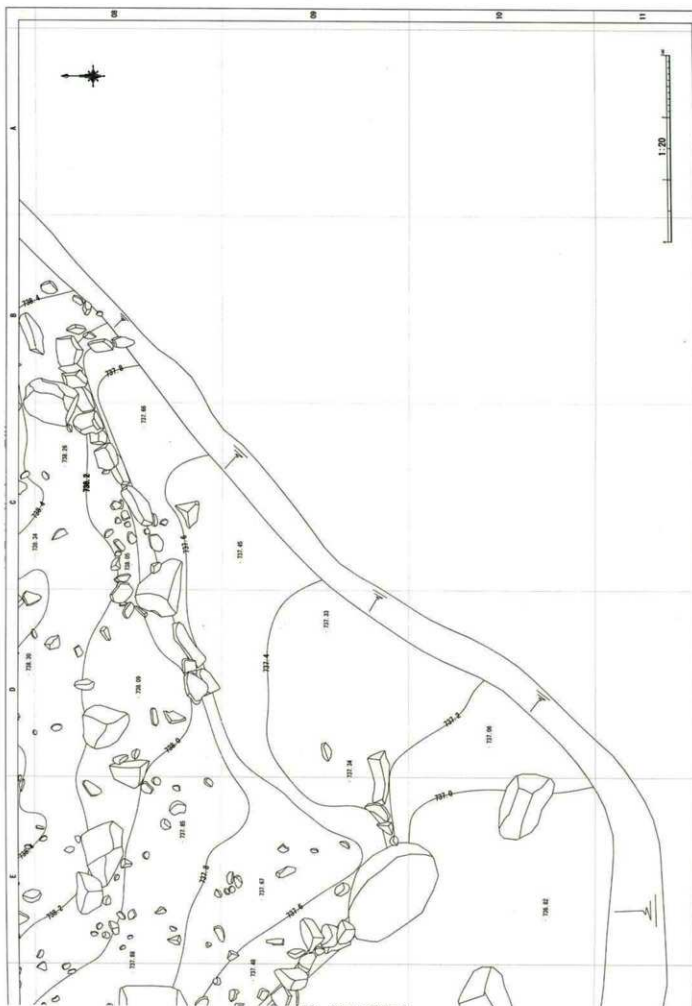


图 13 遭構灾测图 6

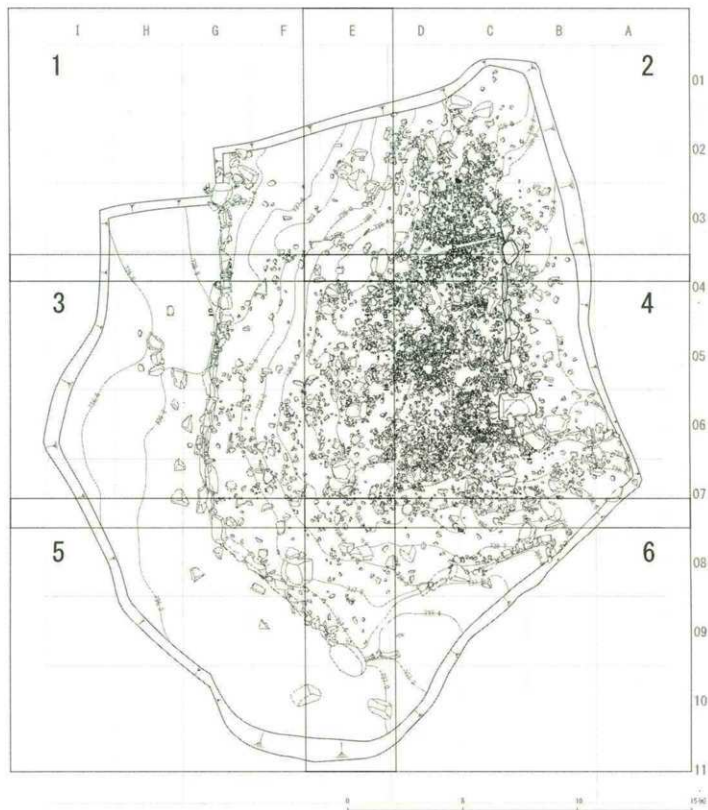
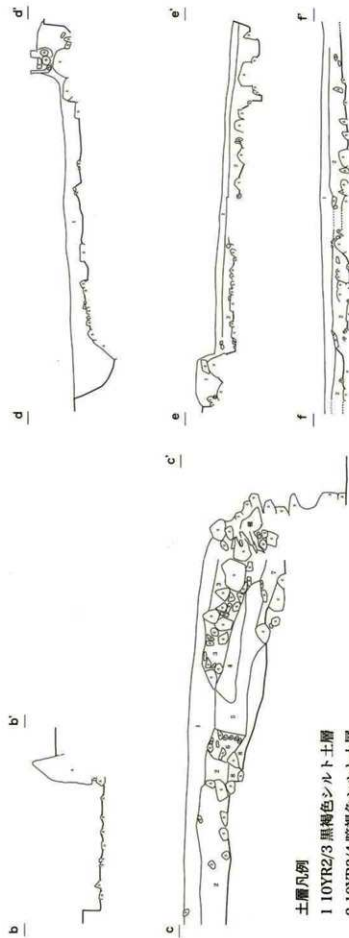


図14 セクションポイント配置図



土層凡例

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト土層
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト土層
- 3 0.1 ~ 0.4 の石を含 10YR3/4 暗褐色シルト土層
- 4 7.5YR4/3 褐色シルト土層
- 5 7.5YR3/4 暗褐色シルト土層
- 6 0.05 ~ 0.2 cm の礫を含む
- 7 5YR3/3 暗褐色シルト土層
- 7 7.5YR2/3 極暗褐色土層
- 8 10YR4/4 褐色土層 (地山)

図 15 セクション図



PL.15 墳丘の名残と思われる石積
(南西)



PL.16 石積の断ち割り 耕作地の
造成跡の下に地山がマウンド状に検
出される(北)



PL.17 石室部の掘り上げ 手前に
排水溝(北東)

PL.18 完掘 石室部該当範囲に礫
が濃密に出る(南西)



PL.19 完掘 写真左に排水溝(西)



PL.20 完掘 排水溝(東)





PL.21 完掘 排水溝と石室該部
(北東)



PL.22 完掘 (北東)



PL.23 完掘 (北)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	やまこしこふん
書 名	山越古墳
副 書 名	平成27(2015)年度県営中山間総合整備事業殿城地区に伴う山越古墳発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	上田市文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第125集
編 著 者 名	中沢徳士
編 集 機 関	上田市教育委員会
所 在 地	〒386-0025 長野県上田市天神一丁目8番1号上田駅前ビルバレイオ5階 TEL0268(23)5102
発 行 年 月 日	西暦2016年3月18日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山越古墳	長野県上田市 殿城字岩戸	20203	36° 42' 01"	138° 31' 81"	平成27年11月17日～ 平成27年12月21日	700 m ²	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山越古墳	古墳	古墳時代後期	古墳	須恵器小片	

上田市文化財調査報告書第125集

山 越 古 墳

平成27(2015)年度県営中山間総合整備事業殿城地区に伴う
山越古墳発掘調査報告書

発行日 平成28年3月17日

発行 長野県上小地方事務所・上田市・上田市教育委員会

編集 上田市教育委員会(事務局:文化振興課)

長野県上田市天神一丁目8番1号上田駅前バレイオビル5階

TEL0268(23)6362 FAX0268(23)6375

E-Mail bunka@city.ueda.nagano.jp